

現代社会における人間の問題（下）

安藤 俊雄

前号に引き続き、故安藤俊雄先生の講演筆録を掲載する。ただ冒頭のごく一部分のみ筆録できなかったことを謹んでおこ
とわりすると共にお許しを乞う次第である。

編集部

身体を分析して水分だとか石灰分だとか脂肪分だとかというふうに分けてみると、人間の身体は戦前のことでございしましたが、確か十円にもならないということでありますね。ですから、今仮りに十円が一万円になったとしてもですね、一万円にもならない、そういう肉体として自分を見ろということには、つまり石灰分だとか脂肪分だとか鉄分だとか、そういうものの塊りとして見ることでですね。けれども、単なる物質は動かないが、人間は腹もたてるし、いろいろな仕事もするから唯の物質じゃない、じゃ何だろうということ、動物だということですね。物質ではなくて動物である、まして万物の霊長だということは、動物の中で一番すぐれた動物である。昔からダーウィンの進化論で有名な、人類の発生起源などを調べる学者は「宇宙には、もともとガス体のもくもくとしたものがあつた。それがだんだん冷却してきて、やがて太陽系の天体が生まれ、その天体の中に生物、カビみたいなものが発生し、それから爬虫類

みたいな動物が生まれた。それが段々分化して今の猿みtainのが生まれて、猿の中から発展的に成長し、生まれたものが人間だ。」といひますけれども、そういう考え方というものは結局、人間というものを、人間じゃなしに動物的自然として見るということですね。自然には山もあり川もある。そういう山・川などの物質の中に生まれたものといふふうにかえる考え方でございますから、そうすると現代は人間ではなしに人である。人といったところがせいぜい、動物的・自然的なものという考え方で、そういう風に考えた方が割り切つていいということが、今の私共の文化の進み方で、そういう所に段々と接近していくことでもあります。

そうしますと、私共は人ではない人間だと、こういうことですね、これは犬と猿との間とか或は犬同志で色々の雑種、種類がたくさんありますが、そういう犬と犬との間、狐と狐との間、中には狐と狸のばかしあいなどといひますが、これはうまくあらわしておるですね。人間ということは「関係」人と人との間、ということでは私共はそういう間の中でしか人間としてありえない、そういう生物であつた。ところが人と人との間ならこれはいろいろまた秩序がなくちゃならない、昔からたとへば日本の道徳を調べてみますと、たとへば儒教でいへば五常の道とか、仁、義、礼、智、信と云うような五つの原則を守つていかなければ、人間社会というものは治まらんということをやちゃんときめておる。そういう、たとへば五常なら五常という、人をいつくしむとか、正義を守らねばならんとか、礼儀を正しくしなければならんとか、知識を修めなければならんとか、そういうことをする所に人間の人と人との間の関係といふものが出てくるわけがあります。が、犬と猿、狐と狸のばかしあいをしていくといふ、そういうことをしてでも自分さえ幸せになれたいといふのならば、これは人と人との間ではなしに、それはもう動物と動物、狐と狸の子としての人でありますね。で、そうあつてはならん、われわれは人であると同時に人間である。ところが、お互いに人間同志であつてさえも現代は不幸であります。非常に不幸な時代、隣の人は何する者ぞ、隣の人だけじゃない、家の中でも同じ家族の中でも人と人との間が結べないですね。動物の次元までおろして関係を結ばなければならぬといふことであります。

人と人との間、父と子の間、母と子の間でさえも人と人との関係を結ぶことをしないのですから、先程午前中の話し（前号掲載）のように、いわんや自分一人は人間であるつもりでありましたが、山川草木の自然を相手にしてですね、それと人との間の関係を結ぶということは非常にむづかしいことですね。で学者は、そこを回復しなければならぬ。つまり人間と自然との間、自然環境との間にですね。これは唯の山ではない、これは唯の川ではない。大方広佛華嚴經というお経の中には「佛佛相念」つまり佛と佛とが互いに相手を佛として尊重し敬うという。お釈迦様は、悟りをお開きになりました時に、そういう山や川や菩提樹や、小川のせせらぎの水にも、その中に宇宙の全体があり、その中に佛様がおいでになるというふうにみてですね、向こうの佛様も自分を佛と想うてみて下さるが、自分も自然の世界を佛として拜む、そういう佛と佛との関係にまで高めた所に佛法というものがある。大方広佛華嚴經という非常に膨大なお経の結論を申せば、そういうことをお説き下さったものである、ということをお席で申しあげたのでございます。

このことを今の世に於て、私共が、二千五百年の昔をなぜ思い起こさねばならないかということにつきましては、現在の人間精神というものは精神病理学的な立場で診断をしなければならないという声が、これは外国の方で非常に大きな運動になってきております。ヨーロッパばかりではございません、アメリカなどの精神医学者の間で佛教が非常に注目されているわけです。佛教の研究はずっと前から外国で非常に盛んに行なわれておりますけれども、最近は特に又精神病、精神医学の上から佛教というものが非常に重要視されてきた。ということは、一例として元ハイデルベルグ大学のドイツ精神医学の権威者であるヤスパースという人、その方がそういう観点から現代を救う教えとして佛教というものを問題にされた。その後、終戦後、アメリカの精神医学者達がヨーロッパへ行きまして東洋には佛教というのがある。この佛教が将来の世界を救う教えである。特に精神病患者に対して非常に大きな功績がある。ということをお目しましたのです。それをですね、日本の精神医学者達が、ドイツ、ヨーロッパでは今精神医学の中心は

ドイツのベルリン大学とかハイデルベルグ大学、スイスのチューリッヒ大学、オーストリアのウィーン大学、そういう所へ日本の精神医学者達が留学しましてそこで佛教が大事だということを教わってですね、それで日本へ帰ってきてから佛教を勉強するお医者さんがたくさんございます。東本願寺前の法蔵館の主人がいました。「先生、この頃びっくりしますわー」、「なんです」というたら「本が売れてしょうがない」、「いいじゃないか」、「そんな事は不思議じゃないのですが、お医者さんが佛教の本を読むのに感心しました」っていいましたよ。決して誇張というわけじゃございませんから法蔵館へいったら聞いてみて下さい。つまりですね、たとえば東大の名誉教授でキリスト教の内村鑑三さんの子供さんで内村祐之教授、京都大学の村上仁教授とかですね、皆ヨーロッパの精神医学の研究の結果、佛教を学ばねばならないことになって、ですから、そういう精神医学の先生方は非常に佛教の知識が深いんですね。そういうことになるということは、なぜかといいますと、これはお釈迦様がですね、お釈迦様はだいたい医学を研究なさったお方です。帝王学の一つとして医学を勉強なさったお方で、当時のインドはですよ、二千五百年前のインドではすでに麻醉剤、帝王切開、それから頭部の切開手術などちゃんとやっついて、世界の医学では一番古い歴史を持っている。そういうことですね、現代でもインドは西洋医学のほかにヨガの病院が始まっている。佛教以前からインドにありますヨガの医学をやる病院がだいたい半々位になっている。というぐらいですから、インドの医学というのは歴史が古い。

ところがですね、その古いインドの医学の歴史でですね、たとえば龍樹菩薩は眼科の眼の手術が上手だということで有名ですね。天平の時代に日本の東大寺建立の前に、聖武天皇の時に日本に來ました有名な鑑真が中国から日本へやってくるようになって、何度も船が暴風雨にあって難破して挫折しますが、その五遍目の難破しました時に、出た所は揚子江の鎮江ですね、元の揚州、そこから出発しておりますが、季節風に船はずっと流されて海南島へ行きまして、そしてあの広東に上陸して、そしてずっと今の江西省を北上して又自分の故郷の鎮江へ戻りますが、その時に失明しま

すね。鑑真は東大寺で聖武天皇に迎えられ、鹿兒島灣に六度目に上陸しますが、その時には、目は失明しております。けれどもその五遍目に失明して広東省を北上する時にインドの坊さんにあつてインドの坊さんに手術してもらいます。その手術は、その時は成功したんですけれども結局又目はつぶれてしまいました。その時のインドの坊さんというのは龍樹菩薩の眼科の治療法をテキストに持って歩いておった坊さんだといわれております。目の治し方だとか、いろんな薬の調合だとかそういうようなことが書かれた、龍樹菩薩などいろんなインドの医学に明るい坊さん達のテキストは、たとえば今京都の西にあります御室の仁和寺に国宝として『医心方』という本がございますし、京都大学図書館には龍樹菩薩の医学のテキストが、これも国宝として今日に残っておる。というようなわけでございますから、お医者さんの医学、内科、外科、産婦人科、その他今日医学のあらゆる分野についての医学の知識というものは、二千年五百年昔のお釈迦様の頃にすでに相当な発達をとげているんですね。にもかかわらず佛法でなければならんとおっしゃった。つまりお釈迦様がカピラ城の皇太子の時に、帝王になるための学問として医学を修められたけれども、その医学では本当の病を癒すことはできないという所から、そこで悟りを開かれて佛教をあらたに進められたということであります。

そのことが今問題になっている。今、現代精神医学の上でいえることは、或は社会の環境医学の上においてもですね、現代は一種の精神病の症状が全体的に深まっている、人類は次第に精神病になりつつあると、これは少しオーバーな言い方ですけれども、憂える人はこういうふうにならしている。そういう精神病の症状が次第に悪化していくのを止めるためには、キリスト教では最早だめである、どうしても佛教でなくてはならん。ということは佛陀が教えて下さった。ということで佛教に心を深めているわけですね。そのことはお釈迦様が一番よく知っているし、又当時のインドのお医者さんがよく知っている。今その一つの証拠をあげます。いろいろお経によりますと、お釈迦様のお弟子がたくさんおります。一番おなじみは舍利弗だとか阿難だとか目連だとか富樓那だとか、こういう名前のお弟子は

みんなおなじみで皆さんよく知っておられますね。或は観世音菩薩だとか勢至菩薩とか、非常におなじみのお弟子がおりますね。ところが、お釈迦様のお弟子の中にそうおなじみではないがいつもひかえめにお一人のお弟子がおります。それは耆婆といいます。耆婆という人はインドの一番最高の権威のあるお医者だったんですね。そのお医者さん、たとえば阿闍世王が親不孝をして頻婆娑羅大王を七重の牢獄に押し込めて殺す。それからお母さんの韋提希夫人を奥座敷に押し込めて、食糧を与えないで死ぬのを待っている。というこの有名な観無量寿経の舞台の主人公の阿闍世王という悪人がございますね。

その阿闍世王が待てど暮せどお父さんが死なない。よく調べてみるとお母さんが密かに体に蜜を塗って牢獄に忍び込んでお父さんに食糧の補給をしているということがわかって、「おのれ」というので刀を取って母親を殺そうとすると、そこで止めようとする人の中に耆婆という人が出て来ますね。観無量寿経はそれから始まって、韋提希夫人が七重の牢獄の奥座敷で「なんとという私は不幸な人間でございますか、どうぞお釈迦様、世尊よ、ここへお出まし下さってこのあわれな私をお救い下さいませ。」とこう言って頼んだ。そこでお釈迦様は、耆闍崛山においてになったお釈迦様が神通力でそれを、韋提希夫人が苦しんでいるということを御覧になって、その韋提希夫人の所にお越しになって、じきじきに念佛の十六の観法をお説きになるということが観無量寿経のテーマになっておりますね。これはまあ観無量寿経だけでございますが、その阿闍世王はどうとうその親不孝が元になりました、まあ何というのですか、今で言えばハンセン氏病と言うのですか、全身ふくれあがってしまったってもうだめになる。そのだめになっても、死を目前にして阿闍世王が自分の弟子達にどうすれば良いかって聞くわけですね。死が迫っている……。親不孝の阿闍世王もうろたえてですねえ、どうしようこうしようと、これは涅槃經の中にその顛末が書いてございます。そうするとそこで、昔で言えば六師外道と言いますか、六人の当時のインドの権威ある学者達を一人一人呼びつけて「私のこの病いを治すにはどうすれば宜しいですか。」と聞きます。するとそれぞれ医者が「いやどうも、こういう時にはこうい

うことをなされれば利きめがあります。」と言って、それぞれ当時の学者として有名な人人がそれぞれ進言をします。最後に阿闍世王は耆婆に尋ねるんですね、つまり当時インドの医学を代表する最高権威者の耆婆に尋ねますと、耆婆が「そりゃあ今あの六人の人達があなたに申ししているような方法ではだめです。あなたを治すのはただ一つ、今耆闍世山においてになるお釈迦様の所へおこしになって、そしてお釈迦様に治していただくのが一番です。」ということをお話になります。そこで阿闍世王は急いでお釈迦様の所に行きますと、お釈迦様は、いろいろと筋道を立てて阿闍世王に教えますね。そこで阿闍世王は急いでお釈迦様の所に行きますと、お釈迦様は、いろいろと筋道を立てて阿闍世王にお話になった。そして諄諄とお釈迦様は阿闍世王にお話しになるうちに、その説法を聴聞している阿闍世王の体のウミの爛れた症状が少しづつ消えて、最後には全快してしまうという。ちょっと、そこがそのなんだかまゆつばもので半信半疑にしか聞けないと思います……。

私は、そのような医学の限界を越えて治すものは何かというと、耆婆が佛法でなければならぬ、佛教が本当に全快させる道だといって阿闍世に勧めるといふ所が大事だと思えますね。そりゃあ当時のインド医学の限界がそこにあるって、お釈迦様の教えがそれより上であるということでございますから、現代には当てはまらないという人があるかも知れませんが、しかしドイツの精神医学者の最高権威者だったヤスパース、それから、今スイスにおりますハイデッガーという、これも実存哲学の権威者です。それからもう一人は、オーストリアのウィーン大学に精神科の主任教授フランクという名の人がございますね。このフランクという人は第二次世界大戦で、この人はユダヤ人なんです、ドイツのナチスに捕えられて収容所に入れられて、例のガスで殺される中をですね、幸運にもお医者さんであったということであと回しにされて危うく死を免れたという人ですね。『夜と霧』という有名な書物を書いておられます。でこの人が戦争後に、ウィーン大学の精神科の主任教授になっている。日本の精神科の先生はみんなここへ行きますけどね、この先生は精神医学の上で、患者を治療するにはもちろん症状に応じて、躁病でいらいらしているとか、鬱病でめいっているとか、いろいろ症状に応じ安定剤をやるとかいろいろんな薬物投与ももちろんしますけれども、それ

だけではダメなんです。最後は何かというところ、この人はロゴセラピー (Logotherapie) というのを提唱しておるんです。ロゴセラピーというのはロゴスで治す。ロゴスで治すということは論理で治すということで理屈で治すということとです。けれどもズバリと言え、もう医者であることをやめた、本当の患者と一対一の話し合いをする時には、もう宗教より他には治しようがないと言うんですよ。この先生は始めはキリスト教だったが、今では佛法より他には無いと言っています。佛法にはロゴスがある、そのロゴス、論理を納得してさえもらえれば必ず患者は、精神病患者は治る。先程も言いましたように梅毒性患者だとか、そういうのは薬物療法でないと治らない。でも現代、世界中で蔓延しておる強度のノイローゼから生ずる色々な精神分裂症なんているのはもう手も足も出ん、もう薬でも治らん、電気療法しようが何しようが治らんという、もうこのような精神分裂になんかなくなったものは、前生で何か悪いことをしたその罪の罰だなんて言うほどの位に、みんなお手上げになっていたものですね、この人は治すということです。事実その効果があつて治る、ということとで世界中の精神医学者達がみんなびっくりしてそこへ集まって研究をするのですね。これはもう医学を越えて一対一で、お医者さんはまるでお坊さんであり、患者は聴聞するお同行であるという。一対一で火花を散らすその問答、コミュニケーションをやる。そうすれば、必ずどんな人でも治るといふ信念を持つてですね。これが今世界で非常に問題になっております。それで京都大学のたとえば、村上教授、木村助教授だとかこういう人達は完全に佛教学者ですね。こういう人達はもう坊さんですよ。

今から二千五百年昔、お釈迦様御在世の頃に維摩経というお経、御説法がありますね。有名な維摩居士という、坊さんじゃない、素人で佛敎を説いた人ですけれども、お釈迦様の十大弟子の誰よりもお釈迦様の敎えを覚っているというお弟子がありましたね。この維摩が病氣になってお釈迦様のお弟子がみんな見舞いに行くのをいやがる。「阿難、今、維摩が病氣であるから、お前行って見舞いに行つてきてくれ。」「お断わりします、他の人なら行きますけれど、あんな恐ろしい人はよう行きません。」「何故?」「必ずケチをつけるからです。『お前みたいな者は、お釈迦様のお

弟子としていつでもお側にくっついていられるけれども、佛法と言うものはちつとも判っておらん。』ぼろくそに叱られるんですからまっぴらでございませう。」「それじゃあしょうがないから弥勒、お前は。」「ああ、私もかつてこれこれしかじかで、ひどい目にあったことがございます。よう見舞いに行きませう。」「だって向こうは病氣じゃないか。」「いや行けません。」「……………阿難は行かん、弥勒は行かん、舍利弗は「まっぴらごめん」。舍利弗も行かん、富楼那も行かん、誰も行かん。みんなお断わりというのですね、有名なお話ですな。」

そこでお釈迦様は「誰も行かんのか。」と言って啞然としておいでになると、文殊が「では私が参りますよ。私はまあ、あの人が苦手で、会うときと何かケチをつけられますけれども、誰も行かんというのならば、私が参ります。」と言って出かけますね。そして維摩の家へ行くと、維摩はわざわざ「それ来た、お釈迦さんの弟子達が俺の見舞いに来よる。」というので、わざと維摩は自分の部屋をカラッポにしています。そして待っている。一番始めに文殊が入って、後みんなビクビクしながら維摩の部屋に入って来ます。すると維摩が「何しに来たか。」と言う。文殊が「世尊の言い付けでああなたのお見舞いに参りました。どうぞでございますか。」こう言って聞きますと、維摩が「見舞いの仕方をお前知っておるか、病人の見舞いをするには、病人の病いを治すことのできる者でなければならぬ。そういうことをちゃんとみな知っておるか。」こう言われてですね、それから散々この十大弟子が維摩に説法されると言うのが維摩詰所説経の問疾品という章のいきさつでございます。でこのことから私は、現代に於ける人間の問題という、大きな標題について申し上げるんですが、やっぱり二千五百年の昔も今も変わりが無いと思えますね。その証拠には、まあ仮りに自分の親戚や、或は知人の病氣見舞いに行く時のことを考えてみてください。相手が軽い病氣の場合には良いんですが、いよいよ臨終を目の前にしているという、もうお医者さんもお手上げ、家内、眷属からも見放されている、今日か明日かと言うような病人があって、どうしてもそのお見舞いに行かねばならぬということになってですね。あなた方がお見舞いに行くとしましよう、どうしますか。

あなた方はあなた方の責任に於いてなさるのですが、殊に私ならです、非常に困るんですよ。何故、どうして坊主が臨終の人を見舞いに行くことが困るのか。そりゃあ専門の話をして「人間ていうものはみんな、桜、桜、散る桜も散る桜、残る桜も散る桜、ですからあんなだけじゃあない、むしろ死ぬんですから、お互いにそう差別があるんじゃない。辛抱して腹決めて死んでください。」とも言えんでしょうねえ。そんな訳にも行きませんね。せっかく見舞いに行く以上は死の悲しみと苦しみを悩みの真最中であって一分一秒を争うその人に心から温まるような、そう言うお見舞いが出来にゃならんですね。ことに私はですね、今は大分そういう習慣は無くなってきましたけれども、私の方ではまだ少しございます。家族で誰か病気になって、もうお医者さんが「まあ二十四時間だね、家族の人に連絡した方がいいでしょう。」なんて言われるとですね、さっそく手が私の家へ参ります。「どうぞ一遍すぐ来てください。」事が事ですからね、いやとは言えませんが、「私が行きましょう」と行く。まあ息が苦しそうで、ハアハアちゅうとその病室におる人たちもとても真剣な顔ですわね。もうそれこそ本当に、家族の大事な人が、今か今かという臨終ですから、悲しみと不安と、何とかしたいという溺れる者はワラをもつかむ思いでしょう。どうしますか、その時。私の父はそういうことはうまかった、と言うより信念を持っていたから父は良かったですがね。父は入っていき、「いよいよよお浄土が近づいたよ、さあ念佛を唱えよー。」そうやってね、その雰囲気ですうっと方向転換をして非常に力強く、まあ何と言うのですか、真心から出る言葉はあらゆる技巧を越えた強さがございますね。それはなかなかやれることじゃないですよ。だってね、大抵は「大変ですなあ、どうぞ気をつけて、心を確かにして、何とかして最後の最後まで頑張ってくださいって早く良く癒って下さい。」なんてことを言うてね。そんなことを言いに行くのならば、坊さん頼みに来やしないんで、私でも良いと思って頼みに来られた以上は、何かもって強い確信をもって打ち出すものを、それが要求されているんだが、そういう真剣な厳肅な場に本当に言えることは何もない。

親鸞聖人が七高僧の一人に数えておいでになります所の源信僧都の往生要集のしまいの方に「臨終の念佛」の一項

がございますね。そこを見ますと、源信僧都は「臨終をひかえている病人を見舞いする時は、余言はいらん、他のことを言うんじゃない。ただ念佛称名を励んでですね、そうしてその病室にいる者みんな声をそろえてナムアミダブツ、ナムアミダブツ、ナムアミダブツと唱えよ。」と言うことを勧めておいでになります。分らんへたな事を言うよりも、あれはあれに限る。自分の言葉を言いつこ無しで「みなさん、ここで念佛を唱えましょう。ナムアミダブツ、ナムアミダブツ。」とこう言い得ればいいんですがね。ちょっと早いような気がするでしょう。でまあ病人にはいいかもしれません、枕辺におられる親族の人や、中には若い人もいたりして見まい見まいとする人もいますしね。そうかと言つて突然「みなさん念佛を唱えましょう、ナムアミダブツ、ナムアミダブツ。」なんてなかなか言えないですよ。で最後まで、せいぜい「ここで一つ御文さまでも上げて、みなさんで聴聞いたしたいと思ひます、大変お悪いようですから御文さまをいただいて、互いに一番大切なお念佛を唱えようやないか。」と言つて『末代無知』をやるのもなんだから、一番近いと思うのは『夫れ、人間の浮生なる相をつらつら観するに……』と。しかしこれはどうもその場にピッタリ当たり過ぎてね、『朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり。』これじゃなかなか言えませんよ。と言うことは、私共が現実の社会の中におつてですね、一番大事なことを一番疎かにしておると言うことと、さうね。それくらいに現代は、ハッキリ言えば、僧俗共に私共、本当に「大事」ということを、忘れてしまつてゐるということですね。

今のフランク教授は、何故そんな科学としての医学と言うものの限界を越えて宗教でなければ人の心は救えないと言つたかについて、たくさんな実例を講演集に著わしましてね、日本では「みすず書房」ですか、キリスト教関係の書物を出しておりますが、その書物の中に『フランク選集』というたくさんな講演集がございます。それを読んでみますと、いろんな、アメリカから映画女優が行きますとか、有名な実業家が行くとか、と言うような、それぞれもうかなり精神異常の重態になつてゐる者が、わざわざウィーンを訪ねてフランク教授の診断と治療を受けるわけ

です。でもあの症例と言いますか、治し方と言いますか、まあ読んでよく判りますけれども、フランクル教授は何故そういうことを思い立ったか、と言いますと、人間というのはキリスト教で言えば神性、神の性質というものは、最後まで絶望してはならないことですね。だから佛法で言えば、人間はどんな悪人でも、どんな弱い人でも、佛性が必ずあるという確信ですね。それは何処から生まれたかと言うと、ユダヤ人をガス室に入れる時に、みんな風呂へ入れてやるから、着物を脱いで風呂へ入りなさい、と勧める。そうするとユダヤ人達は長い間風呂へ入ってませんから、風呂へ入れ、と言われると有頂天になって喜んでその部屋へ入って着物を脱ぐ、で着物を脱いだら、あちらが風呂のある部屋だと言われて、風呂場だと思って入った所が、実はガスで殺す部屋になっておる。という、その気の毒なあわれな身に会うユダヤ人が、何十万何百万と、この第二次世界大戦の最中にナチスによって行なわれたわけですね。ところがですね、フランクル教授は医者として残されて、自分の同朋のユダヤ人が、ガス室に送られて行く姿を毎日見ておるわけですね。そうすると、「今日はいよいよお前達の番だ。」と言って何百人の人達がガス室に入る事を宣告される。するとみんな喜んで着物を脱ぐ、無一物になってその部屋に入る。ところがみんな知らんじやない、知っている。風呂に入るのではない、最後ガス室へ入って一人残らず殺されてしまうということを知っている。知っているのに、その最後行く時には、行進して、行く際には泣いて国歌を歌って、合唱してガス室に入っていく。「ユダヤ人の自分の同朋の姿を見ている時に私は、その時にハッと医者として感じた、それは死をも貫いて、死を目前にして、洋服を脱いで一步入ればガス室で、死の部屋に入る、その死をも恐れないで国歌を歌って進んで行く」という人間精神の中に、やがて神になる力がある。やがて佛になる力があると言うことを、自分はその時にインスピレーションで感じた。だから精神病患者がどんなに精神分裂病のような者であっても、必ずこの人は治る。この人はだんだん精神状態が非常に楽になる。だからそういう分裂病でさえも、必ず佛性がある、必ず神性がある、必ずその死をも通り抜けて行く力というものを開発することが出来る。そしてこれは信仰の力だ。」と言うことですね。一例

を挙げますならば、この先生には看護婦の婦長さんが十九年間ついてフランクル先生を助けていた。その婦長さんがガンである。仕方がないからその婦長さんを別の外科だか内科だか知りませんが、そこへ入れて病院で治療をさせる。ところがどうしても切らなければならぬと言うんで切る。でまた以後の静養をしている、ところがなかなか経過が思わしくない。そうしたらその看護婦さんがノイローゼになってですね、気が変になってきた。そりゃまあ精神科の方ですから、病院の方から通知があって、フランクル教授に「あなたのガンの婦長さんがノイローゼで精神異常になっておるから来て下さい。」と言うので頼まれてびっくりして行ったら確かに異常である。でフランクル教授はそこでなんとかして助けてあげたい、なんとかして正常な精神状態に治してあげたいと言うことで努力する。努力したんですがなかなかうまく行かないと言うことで、最後こういうことを言われたそうです。これが一番効果がある。ロゴセラピー (Logotherapie)、論理、理屈、理屈って言いますか真理ですね、真理を教えることによって、その人の心の病いを治すことが出来るって言うんですね。そう言う療法、真理療法ですね。これが一番良い実例だと思いますが、婦長さんにこう言ったそうです。「あなたは長い間私を助けて下さった大事なお方です。でガンの方の経過はあんまり良くありません。おそらくあなたは数十日の間には死を迎えなければなりません。私は嘘は言いません。あなたはもう間もなく臨終を迎えなければなりません。そこで一つお願いがある。あなたはノイローゼになっておられる。死が恐いのか、ガンの痛みが苦しいのか、それも仕方がない、当然のことと思いますが、私は一つあなたに是非ともお願いしたいことがある。今あなたが死を迎える、その迎え方はあなた一人の問題じゃない。全看護婦会、或は全世界の精神医学の連命があなたの双肩に掛けております。あなたが今、死ぬ時に何もすることがないと思っておられるかも知らんが、あなたは死ぬ時に一番大きな仕事が出ております。その仕事と言うのはどういふことかというところ、あなたは一生の間看護婦としての忠実な生活を続けて、そして模範看護婦となり、そして模範の婦長さんにもなって、私の片腕になって下さったお方です。しかも精神医学の看護の仕事をして下さるあなたがどうかその死を、もう数日

の内にあなたを襲って来るその死を、看護婦の婦長らしく、りっぱに迎えて下さい。臨終を取り乱さないでりっぱに死んで下さい。あなたがりっぱに死んで下さるならば、世界中の全看護婦は、あなたを尊敬するばかりでない、りっぱな人間の心の中にある精神力と言うものの自信を持つことが出来ます。もしあなたが臨終を取り乱したならば、もう全看護婦ばかりでない、精神医学全体の運命がこれでもうおしまいになりますから、どうぞお願いします。」とまあフランク教授は涙を流して頼む。

これはもうお医者さんじゃありませんね、これは人間と人間との魂の触れ合いですね。そうしたらどうですか、そのフランク教授の訓戒といえますか、愛情に充ちた激しい言葉を聞いた看護婦はそれからスウツと姿勢も言動も改まって「そうでございますか。私みたいなものはガンでどうしても死ななければならぬことはちゃんと分っております。そう思ったら何だかもう、もういやになってやること一つ一つがもう自分でもおかしい位に気が変になりました。たけれども、今日が覚めました。私にはまだ仕事があるのですねえ。仕事が無いと思ったから取り乱しましたけれども、私にはこのウィーン大学精神科の運命が、或は全世界の精神医学の運命が、この私の双肩にかかっていることを知りませんでした。私立派に死なせてもらいます。」と言って、その看護婦はそれからバタバタせずに静かに従容として死を迎えたということでございます。私が読んだ実例の中で、感動的な所はたくさんございますけれども、これなど、私一番感動的な実例で、非常に感激したのでございますが、これは現代の生々しい問題でございますね。ところで二千五百年前の昔にお釈迦様がそういうことをちゃんと私共に示して下さっておいでになる。

当時インドの医学の最高峰であるという耆婆がですね、「自分はもうお手上げである。本当の医学は佛陀、世尊の佛教でなければならぬ」と言うことで、お弟子になったくらいでございます。もちろん病症によつては、その佛様の教えを学ぶだけで異常が治るわけにはいきませんまいけれども、本当の根本的に治すと言うことは、先ず心からということですね。その意味でお釈迦様は大医王と言われます。大医王、或は医王如来であるとも言いますね。そういう

大医王を現代の場で迎えるべき時期が来ているのではないかと言うことです。今は非常に人間関係が難しくなる、益難しくなっていく。そしてみんなが、やがて自分一人の孤立した、孤独でありながら孤独をも知らない、そういう動物的な生活の中に落ち込んで行きがちな現代でございます。そういう時代を救うもの、時代を救うよりも、我々を救うもの、自分を救うものは何かと、自分一人が助かるということは十方衆生が助かるということですね。その時に私は親鸞聖人ほどの最後の最後までですね、今この看護婦は途中で一度挫折しました、けれども最後気を取り直した。親鸞聖人は九十年の生涯、本当にあらゆる苦難を背負って、じっとこらえて行かれたお方です。本当の勝利はそういう苦難に最後まで戦ったお方が本当の最後の勝利者であります。浄土真宗の念佛の教えというのはなんだか、力の弱い意気地なだけがこの世を回避して未来だけを喜ぶ教えのように誤解されやすいのでございますが、こんな力強い、こんな最後の最後まで社会を捨てない、人生を捨てない、絶望しない、臨終のその時まで人生をいい加減なことでごまかさないうちと云うものは他にないと思えますね。

それは歎異抄の第九章、唯円との対話の中に有名な言葉がありますね。唯円が、私は念佛を唱えてもどうも踊り上がるような喜びが湧いてまいりません。またやがてお浄土へ……と言う話を聞けば、急いで参りたい気になれば良いんですけども、どうもその気にはなりません。どうしたわけでありましょうかとお聞きすると、親鸞聖人がそれにお答えになる。「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじ心にてありけり。よくよく案じみれば、天に躍り地に躍るほどに喜ぶべきことを喜ばぬにて、いよいよ往生は一定と思ひたまふべきなり。喜ぶべき心を抑へて喜ばせざるは煩惱の所為なり。一中略―久遠劫より今まで流転せる苦悩の旧里は棄てがたく、いまだ生まれざる安養の浄土は恋しからず候こと、まことによくよく煩惱の興盛に候にこそ。名残惜しく思へども、娑婆の縁尽きて、力なくして終るときに、彼の土へは参るべきなり。いそぎ参りたき心なき者を、ことに憫みたまふなり。これにつけてこそ、いよいよ大悲大願は頼しく、往生は決定と存知候へ。踊躍歡喜の心もあり、いそぎ浄土へ参りたく候はんには、煩惱の

無ぎやらんとあやしく候ひなまし。」と言う歎異抄の第九章の言葉の中に、弱い感じの、まあ一生お浄土に参りとうなし、念佛を唱えんでも臨終の時に唱えれば参れる。それで良いじゃないか。というふうに読むならば、それは何にも念佛じゃないと思いますね。そうではなしに、私はその歎異抄ばかりではない、親鸞聖人の教えというものは正反對から読めると思う。一つは誤解されて、弱虫の為の逃避する、逃げる、三十六計逃げをうつ宗教であり念佛であるように思われやすい。しかしそうではないんですね。死ぬが死ぬまで、最後まで責任は果たすという、そういう力強い宗教、最後まで台風が来ても家がもうすでに倒れかかっているもなお支柱になるもの、そういうものであるべきだと思ふんですね。それを皆が言うように弱者の為だけに助けてやるというような、例えば歎異抄第四章でも「慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。」なんて言うような所ですね。情け、慈悲というものに聖道門の慈悲と浄土門の慈悲の区別をなさって、その中にですね「今生にいかにあし不便と思ふとも、存知のごとく助け難ければ、この慈悲始終なし。しかれば念佛申すのみぞ、未徹りたる大慈悲心にて候べき。」と、ここでもですね、解釈の仕方では、今生と申すはどんなにあし不便と情けをかけても助かることもあれば助からんこともあって、助からんことはどうしてもしようがないから、あんなものは諦めるより手がない、と言うようにこの文章を読めないことございませんね。けれどもこれは誤解ですわね。親鸞聖人、泣かれると思ひますね。「今生にいかにあし不便と思ふとも、存知のごとく助け難ければ、この慈悲始終なし。しかれば念佛申すのみぞ、未徹りたる大慈悲心にて候べき。」いとおしい、不惑に思ふ、この人は可哀想だ、病身に可哀想だ、と思つて一生懸命に聖道の慈悲で助けようと思つても、そりゃあいけません、やめなさいと。それよりも浄土の慈悲で「お念佛申すのみぞ、未徹りたる大慈悲心にて候べき。」と言うと何かですね、まあ善も神も佛もないし、お医者さんもだめだし、呪もだめだし、何もかもだめですから、あなたお念佛をお唱えなさい、お念佛さえ唱えていれば必ず治るかも知れませんが、「お念佛だけ」と言うことを教えられているように見えますね。そうすると弱いものになりますね。私はそうは思わない、これはまあ歎異抄全体の中で非常に感

動的な言葉ですね。歎異抄にはどの章にも感動的なお言葉がございまして、ことに関東から京都へお弟子やお同行が戻りまして、親鸞聖人がそれにお答えになる、有名な「親鸞におきては、ただ念佛して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとの仰せを被りて信ずるほかに、別の子細なきなり。」なんて所は、これはまた有名な名所ですね。非常に私共感激深い一章でございしますが、しかしですね、一番私は、七百年の時代を越えて私共の心を揺り動かすような感動を呼び起こす文章というものは、第四章の聖道の慈悲と浄土の慈悲をお分けになり、聖道の慈悲ではだめだといって「念佛申すのみぞ、未徹りたる大慈悲心にて候べき。」と、こう言うて下さる所にですね、私共の心を揺り動かして、私共が何かその、ちょっと物足りんようだけれども、無明長夜の長い長い夢を揺り動かして目を覚まさせるような魅力を持っているようなお言葉ですね。そんならお前は解ったかと言われると、私には解りませんよ、解ったと言えば解る、解らんと言えば私にも解りませんが、第四章は昔からいろいろな学者の説明は、読んでみればそうかそうかと。

大智度論に「二人の兄弟が、川を通り過ぎたらお母さんが川に落ち込んで流れて行くのを見て、弟はすぐに飛び込んだ。飛び込んだままでは良いけれど、舟も何もありやせんで、ただ川めがけて飛び込んだもんだから、とうとうお母さんと抱き合ったまま溺れてしまう事になってしまう。だが兄は川とは反対の方角へ飛んで行って一艘の舟を捜し出して、川へ行ってお母さんを助け上げる。」こういう喩が智度論の中にあるんで、それを親鸞聖人が御覧になった。そして歎異抄第四章の「慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものを憫み悲み育むなり。然れども、思ふが如く助け遂ぐることを極めて有りがたし。また浄土の慈悲といふは、念佛して急ぎ佛に成りて、大慈大悲心をもって思ふが如く衆生を利益するをいふべきなり。今生にいかん愛し不便と思ふとも、存知のごとく助け難ければ、この慈悲始終なし。しかれば念佛申すのみぞ、未徹りたる大慈悲心にて候べき」で、そういう訳でこういう文章をお書きになった、と言えはですね。そう何でもない。そう大した仕事じゃあない。慈悲と言うものは、情けと言うもの

に、現代の愛と言うものに、聖道自力の慈悲と他力の慈悲がある。そういうことを言われただけだとすれば、ただそう何も有難いことはございませんわね。ところがどうもそんな事でない。この言葉に何かその人間の運命、或は社会の運命、世界全体の運命を暗示して下さる非常に大きな真理があるということを考えるのですね。それはどういふことかと言いますと、聖道の慈悲はだめだから浄土の慈悲で、お念佛が一人徹底しておればいいというのなら、たとえばですよ、病床に今、死を迎えている娘を持つお母さんは、藁をも掴む思い、本当に自分の命を縮めてもこの子を助けたいと思っっている。このお母さんが八百年、七百年昔の親鸞聖人にお目にかかって「聖人様、どうすれば私はいよいよいいでしょうか。私の命を縮めてでもどうぞこの子を助けてやりたいと思いますが、どうすればよろしいでしょうか。」と訴えた時に、そのお答えが歎異抄第四章だったとしますなら、「慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものを憫み悲み育むなり。然れども、思ふが如く助け遂ぐる事極めて有りがたし」、「あなた、一生懸命今飛び立って行って命を縮めても助けたいと思われてるが、あきません。極めて有りがたしで、めったに助かる事はございません。」「じゃあ私、どうすればよろしいでしょうか。」「浄土の慈悲というのは、急ぎ念佛して佛に成りて、思いの如く衆生を助けとぐるを言うべきなり、だからね、あなたお念佛しなさい、そしてあなたが佛様にまずおなりなさい。そして佛様になったら自分の好き勝手が出来ますから、それからあなたの娘さんを助けて上げなさい。この世界ではね、いかに愛し不便と思ふとも存知のごとく助け難いことです。この世では助けられることがあるかも知れませんが、大体はこの世では助からんことが多くございますから、ただ念佛申すのみぞ、末徹りたる大慈大悲にて候と。あなた、母親で本当の慈悲が、情けが、愛があるならば、あなたの愛情はただナムアマダブツと唱えることで「すゞ」と、まあ親鸞聖人がこうお答えになったとしますね。するとまあ現代女性としてはみんな抵抗するでしょう。まあこんな宗教なら何も有難い事はない。それよりも、もっと現世利益の、何か良い他に宗派があれば、そっちへ行ってみましょうということになってしまいますね。けれどもそんな安価な事じゃない、と私は思います。これはさっ

き私が死を目前にひかえた病人の、そういう厳肅な場面を想定して、そこに私が今お見舞いに行く、或は今自分が見舞われて、何か心の安定を求めて本当に死ぬると、本当に心から自分の一生を意義ある一生であったと、ありがとございました、お世話になりました、私はこれでもう十分でございますと、死ぬるような心になる薬が欲しいと言う状況においてのやりとりがこのお言葉だと思います。他の安価な買物の時の事じゃないのです。死ぬか、生きるか、自分の精神がどのような苦難の中でも、一切の財産を失ない、自分の健康の総てを奪われても、そこに生きる喜び、今ここに生きさせてもらっている喜びが、ここに在るといふ喜びを教えてください。だから私は、親鸞聖人のこれは「とっておき」のお言葉だと思いますね。八百年の長い歴史の昔から身を起してですね、親鸞聖人が今「お前は困っている。他の時には俺は顔を出さんが、俺が出なくても助かるかも知れないが、ここは俺が出なければならぬ。」と出て下さる。膝を乗り出して歴史の籠から身を起こして、現代の問いに出て下さるお言葉が、歎異抄第四章でございますね。で先程のフランク教授によって立ち直った看護婦も同じ事ですよ。死を目前にしたその時に、ぴたりとはまって「あなたは課題がなくなっただけじゃない、死ぬ死に際の問題が、仕事が残っているじゃないか。」と言われて、気を取り直したようにですね。今臨終をひかえた私共に、親鸞聖人が身を起こして、「念佛申すのみぞ、未徹りたる大慈悲心にて候べき。」と、死を目前にして何もする事はございませんが、ナムアミダブツ、ナムアミダブツと喜ばせてもらって、静かに往生をとげさせてもらう事が、これが全念佛者は元よりの事、全人類への一つの模範でありますね。どれだけ大きな光明を輝かせるか、ということを私共に教えて下さる。何も死ぬ事だけじゃありませんが、私共の人生の行く手に、山もあれば川もあるし谷もある。その山・川・谷の度ごとに、ナムアミダブツ、ナムアミダブツと力強く支えられて、私共がこの人生を通り抜けて行く所に本当の生甲斐がある事を、教えて下さるものではないかというんですね。

そういう所で、私共は本当に自分と佛の関係にある。人間が、自分だけえらい目にあっておると思えますと、精神

病の一つの自閉症でございますね。自閉症と言うのは精神病ですね。時々テレビで精神病患者が社長のまねをしてハンコばかり押ししている、そういうのがありますね。あれ見てどう思いますか。そこから「君どうしとるの。ハンコをまだ押すんですか。社長さん……。」何をはたから言おうともちつとも聞こえないようにハンコばかり押ししておく精神病の患者さんの姿、テレビでよく見せてもらいますが、「ああ、気の毒だなあ」と思いますね。しかし私共も、気の毒だと佛様の方から見れば思われているかも知れませんが、自分のカラの中で、自分の人間である事も忘れて、動物になりさがろうとして、自閉症のように朝起きて晩に帰って、ただお金儲けの繰り返しをしているのです。そうではなしに、もっと広々とした大海の中に自己を回復しまして、たとえば親鸞聖人の御和讃のように「大願海のうちは、煩惱のなみこそなかりけれ、弘誓のふねにのりぬれば、大悲の風にまかせたり。」非常にこう広々とした大願海の信心の海と言うような、何もこれは荒唐無稽の虚空の事を親鸞聖人、言うておられるのではありません。そうじゃなしに、平家が倒れ、源氏が立つ、そして飢饉は頻繁に襲って来る。死骸が今、全国各地に横たわっている。そういう苦しい穢れた動乱の世の中においてですよ、親鸞聖人は今のような「大願海のうちには、煩惱のなみこそなかりけれ、弘誓のふねにのりぬれば、大悲の風にまかせたり。」と、非常に広大雄大な、大きな視野の中にですね、この世ではどんなに貧しい一生を送ろうとも、自分の心は大法界の大宇宙の中に、自分の心を遊ばせるといふ。そういう大きな理想の中に九十年の御生涯を送られた親鸞聖人の、本年は御生誕八百年だったということでございます。そういう話でございます、先ず私共は、自分の自閉症的な精神病の症状を脱する為に、外の声を聞かなければならない。人間が人間の声を聞いているだけでは私共本当の対話にはならない。本当の私が、死ななければならぬ私が、どうして助かるかと尋ねた時に答えて下さるのは、同じ人間ではだめなんです。同じ人間であっても、お釈迦様がお答え下さる。或は阿弥陀佛が答えて下さると言う事は、そのお釈迦様という人間を通して「佛」が働きかけて下さるのであります。その御説法、お釈迦様の説法を通して私共は、間接的ではありますがすけれども「佛」の声を聞くのです。そ

の聲は何も、何処か特別の所で、特別の機械を用いて聞くのじゃなしに、生死の大海の中で、朝起きて晩寝るまで、食べたい、眠りたい、怨みしたい、死に苦しめてやりたいと言う。いわゆる三毒五欲の煩惱の大海の中でですね、その見苦しい、汚い、穢れた、恥ずかしい心の波が、そのまま大願海の世界になる場所である。その中に本当は「佛」の力が働きかけているのだけれども、それを働かせない、まだそれを見ようとしないう私共が「実はそうじゃなかった。こんな一生ではあるけれど、こんな汚い世の中であるけれど、実はこの世の中は人間と人間の関係を正しく導いて下さる佛の慈悲が投げかけられている大切な場所である。」と言う事に心を翻す時にですね、私共は自閉症のカラから初めて扉を開いて、広い大海の、大願海の風を受けることが出来るのではないかと言う所に念佛の目的がある。そういう世界に私等の心が働き出しさえすればですね、私共は死を目前にしている患者のお見舞いに行っても、何も恐れることはないし、たとえ維摩居士が待っておりましても、何もびくともすることはしない。本当の一对一で、共々に華嚴経の中のお釈迦様のように、「佛佛相念」みんな佛と佛とが、人間と人間とはみんな佛と佛様同志の念佛の關係に入らねばならないのだと、そしてまた自然の世界の、草や木や川やせせらぎの中にちゃんと佛様がおおいでになるというふうに考えている、という所に念佛の精神があるという事を本日申し上げた訳でございます。じゃあこれで失礼させていただきます。

(完)